2025年4月6日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

心が揺れる主イエス

［マタイによる福音書26章36～46節］

それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」

更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。そこで、彼らを離れ、また向こうへ行って、三度目も同じ言葉で祈られた。それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

[1] 寄り添って下さるお方

　2025年度最初の礼拝を皆さんとご一緒に捧げることが出来ていることを感謝致します。今、教会の暦は「受難節」を過ごしています。今日は、「聖書教育」誌の箇所としては「裏切られ、逮捕される」という小見出しが付いている所なのですが、私としてはどうしてもその前の段落に当たる、いわゆる、主イエス様の、「ゲツセマネでの祈り」の所をご一緒に味わいたいと思いました。

　ただ私は、この「ゲツセマネの祈り」の所を読めば読むほど、これはとんでもない出来事、ものすごい出来事なのではないか、自分にはとても「説教」など出来ないな、いや、出来るなんて思っちゃいけないんじゃないか、そもそも人間の言葉として納めることなど出来ないのではないかと思いました。まあそれは、来週ご一緒に見る「十字架」の出来事もそうなんだと思うのですけれども、正に言葉を超えた神様の秘儀・奥義（原語で、ミュステリオンと言います）があると言いますか、それが示されている事柄なのではないかと思います。

さて、私が今回ここを読んで感じたことなのですが、私たちは良く神様のことを「寄り添って下さるお方」と言いますが、あぁ、本当にそうだ。イエス様が私たちに深く寄り添って下さるというその寄り添い方は、実にこのゲツセマネの祈りにとても深く示されているのかもしれないな、と思ったのです。

[2] イエス様の「揺れ動く心」

　私はつい最近、NHKテレビの『こころの時代―宗教・人生―』というシリーズで、『ゆれる心にとことんつきあって―訪問診療医・岡山容子―』という番組を見て、とても教えられたんです。岡山医師は、関西で、おもに末期がんの患者さんなどを、そのご自宅で診療とケアをされています。50代半ばです。この方が大事にされていることは、どこまでその患者さんの心に寄り添って行けるかということなんです。そう言うと何かありふれたように聞こえるかもしれないですけれども、私がとても感動したのはこういうことです。人は、誰でも最後の時を過ごすことを思う時、「心が揺れる」と言うのです。出来るだけ長く生きたいから最先端の延命治療を受けたいと思う。でも次の日には、そんな必要は無いのではないかと思ったりする。でも家族の中には、一日でも長く生きていてほしいと願う者もいる。自分の命のことなんだけれども、簡単にはすっぱりと割り切ったように決められない。昨日と今日でも違う心になる。明日も違うかも知れない…。この岡山医師は、その「揺れ動く心」をあるがままに聞いて行かれます。そして、自分は「これが絶対にいい」とは言わずに、ある意味、そのままにしておいて、患者さん自身がその心の揺れ動きの中で選択していくあり方を尊重していく、という在宅医療なんですね。

「揺れ動く心」というのは、もしかしたら否定的にどっちつかずに捕えられることが多いかもしれませんね。でも、「揺れ動く」ということは実はとても人間的なことなのではないでしょうか？

　皆さん、今日の聖書の箇所を見ながら、黙想してみて頂けたらと思います。この26章の場面を振り返ってみましょう。時は夜です。あの「最後の晩餐・過越しの食事」は終わり、もう12弟子の一人ユダは御許を去っています。…今、イエス様と弟子たちはオリーブ山にいます。時は夜です。ここでイエス様は「今夜、あなた方はわたしにつまずく」と予告します。それに対してペトロは堂々と「たとえ皆がつまずいてもわたしはそうではありません」と言いました。これは本心だったと思います。自分がイエス様を裏切るなんて全く思ってはいなかった。初めから裏切るつもりで弟子になる人などいないでしょう。ユダだってそうに違いありませんよね。しかし、イエス様は仰いました。「あなたは鶏が鳴く前に、わたしのことを知らないと言うだろう、しかも三度も」と。人間は、自分のことが分からないということです。私たちの心は、自分で自分を裏切るのですね。でもペトロのように「私は不動だ」と思いたい。けれども本当は不安定な、揺れ動く心がある。それを誰よりも知っておられる方、それが主イエスなのだと思います。

[3] 私たちの人生の真ん中で、この主が祈って下さっている

そして、このあと26章36節以下で、イエス様ご自身がこのゲツセマネにおいて、心揺れ動かせておられる、ということを私たちは見るのですね。私は、よくぞ聖書はこのイエス様のお姿と祈りの言葉を残してくれたなぁと思います。

36～38節。「それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」　イエス様、独りでは居たくないんです。「わたしの許を去って行く」と予告された弟子たちに、傍にいて欲しいと願われています。…そしてご自分の深い悲しみを、この弱い弟子たちに打ち明けておられるのです。私たち、この時の主の悲しみ・悶えというのがどういうものなのか分かるでしょうか？いや、分からないんです。それでも主は仰います。「わたしと共に目を覚ましていて欲しい」と。主はあからさまにご自分の苦しみを私たちにも共有して欲しいと願われている。私たちはイエス様さえここで心が動揺し、恐れを抱かれたかということを知り、慰められます。…しかし、このあとは人間が入り込めない、父なる神様との深い祈りのぶつかり合いをなさっています。39節。「少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「主よ、出来ることならこの杯をわたしから過ぎ去らせて下さい…」と祈られます。それで終わりません。主のお心は明らかに揺れ動いておられます。どれだけの時間が経ったことでしょうか。遂に主はこう言われます。「しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」。…これで終わったかのように私たち思いますが、そうではありません。その後、眠りに落ちている弟子たちを見ます。しかし彼らを叩くのではなく「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」と、彼らのことをおもんぱかっておられます。その後主は、孤独の中で祈りを重ねます。42節に「更に、向こうに行って」とあります。心がまだ落ち着かないのではないでしょうか。そして、二度目の祈りをされます。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように」。…またその後、眠っている弟子たちを確認した後、三度目にも同じ言葉で祈られたと記されています。

私たちも「御心が行われますように」と祈りますよね。しかし私たちのその祈りはどうでしょうか。私たちは神様は恵み深い方だと既にイエス様を通してもう知っていますから信頼してそう祈ることが出来ますけれども、この時のイエス様は、ある意味神様の御思いが見えない苦しみに中におられたのではないでしょうか？本当に父なる神様に真正面からぶつかって、胸倉を掴むようにして見えない御心を問うていったのではないでしょうか？私たちが知らない恐るべき神様、その神様とがっぷり四つに組んで下去ったのだと思います。そしてそれによって、本当ならば私たちが戦わなければならない戦い―滅びから命に移される戦い―をイエス様は、もう戦い抜いて下さったということなのではないでしょうか？その戦いを戦い抜かれたイエス様は弟子たちに語られました。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」―何ということでしょう！主は、主を裏切る私たちの手を取って、「立て、さあ、行くぞ」と御許に引き寄せて下さっているのです！

先ほどお話しした岡山容子医師は、仏教の信仰を持っている方です。けれどもこの方の言葉で、あぁ、本当にそうだなと思った事があって、それは「私たちは時に寒い冬のような風にさらされる時があるけれども、信仰は、自分の心の中にストーブを与えてくれる。そこで温められるので自分もこの仕事が出来る」と仰っていたんです。あぁ、そのストーブは私たちにとって、イエス様その人だなと思いました。―「御心がなりますように」。「主の祈り」の中にもありますね。しかし、これはこのゲツセマネでイエス様が戦い抜いて下さった所で獲得して下さった祈りの言葉でもあるのですね。そのことを覚えていたいと思います。私たちの人生は、絶えず揺れ動く心を抱えて生きて行くのだと思います。けれど、主イエス様ご自身、心の揺れ動きを私たち以上に深く体験されておられるということ、そして、死や罪に恐れを抱く私たちの人生の真只中でこの主が祈って下さり、勝利して下さって、一緒に生きて下さっているんだ。そのことを忘れないでいたいと思います。

お祈り致します。

主よ、今年度最初の礼拝、また主のご受難を覚えての礼拝を捧げることが出来て感謝致します。あなたは、本当の意味で私たちに寄り添って下さるお方であります。それは十字架の前にこのゲツセマネにおいて、既にあなたは私たちにその深い愛と赦しを教えて下さいました。ですから私たちはどんなに揺れ動いても大丈夫です。そしてどんなに暗い所に置かれても、あなたが光となって下さいますから、感謝します。どうぞ、日々心から「この世界と私たちの中に、御心がなりますように」と祈って行くことが出来ますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。